

2025 年の白露(はくろ)は9月7日。

次の節気である秋分前日までの期間 9/7~9/23 を指す場合もあります。

草や木に白い露がつくようになるとされる「白露(はくろ)」。

暦の上では、大気が冷えてきて露ができ始め朝晩に秋の気配を感じる頃と言われていますが…実際はどうでしょうか？

すでに秋に入っていますが、今年は残暑が厳しく暑さはなかなか収まりません。

何かと体調を崩しやすい季節の変わり目には、暦を意識し、

自然のリズムに合わせて、心と体をいたわる暮らしを

心がけてみてはいかがでしょうか。

暦の上では二百十日のあたりは古くから、野分などの災害が
起こりやすいとして、厄日(やくび)として警戒していました。

二百十日のほかに「二百二十日(にひゃくはつか)」も、
同様に野分などが多く、厄日として警戒されていました。

今年の二百二十日は9月10日(水)です。

酷暑から解放される日はいつになるでしょうか。

今年もまだまだ厳しい残暑が続く見込みです。

気温の変化や野分(台風)による風雨に十分に気をつけて、
健康にそして安全に日々を過ごしましょう。



大いなるものが過ぎ行く野分かな 高濱虚子



風神雷神図風呂敷

大自然の人知を超えた台風(野分)を目の当たりにした、
昭和9年9月21日の室戸台風が上陸した日に詠まれた句です。

この日は、「家庭俳句会」が鎌倉の鶴岡八幡宮で句会が行われ、午前中は雨風が強かったが、
午後には雨は止み、風がひゅうひゅう吹いていたそうです。

鶴が岡八幡境内の強風による被害を目にした虚子は、目には見えない「風」というものに、
「大いなるもの」の働きを感じたようです。

この「大いなるもの」の前では、謙虚にならざるを得ない。

掲句は、句集『五百句』に入れる際の推敲(すいこう)で初めて「大いなるものが過ぎゆく」
の形となったそうです。

台風の南風は北上するように北向きに吹くものだが、「北に行く」が「過ぎゆく」と推敲され
て、抽象化され単純化された。

「過ぎゆく」と表現して初めて、目には見えない「風」という「大いなるもの」が、人間に
関わりを持ちながら通り過ぎてゆくという、実感を伴う形となったとのこと。

虚子は推敲した足跡を残らず「句日記」や、「ホトトギス」に残しているそうです。